

Shorai Foundation for Science and Technology

公益財団法人

松籟科学技術振興財団

松籟(しょうらい): 松のこづえを吹き抜ける風。また、その音。

財団案内 2025年度

2025年度 研究助成募集要項
9頁記載

2024年度 助成金贈呈式

松籟科学技術振興財団は、第42回(2024年度)研究助成金贈呈式を2025年3月18日にシャングリホテル東京にて開催しました。採択された16件の研究テーマに対し、1件200万円、総額3,200万円の研究助成金を16名の受領者に贈呈しました。

2024年度は、研究助成対象として、「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用」、「エレクトロニクスの次世代を担う材料および周辺技術」、「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化」の3つの研究課題について募集し、それぞれ38件、15件、34件 計87件の応募がありました。選考委員会(委員長:中條善樹 京都大学名誉教授)にて審査の結果、16件が採択されました。

当財団は、2023年に創立40周年を迎えたことを機に、より充実した支援を行うために、助成金の上限を1件につき200万円(従来100万円)に増額しました。今回の贈呈により、助成金の累計は823件、総額9億3,290万円となりました。

贈呈式では、来賓を代表して、文部科学省 松浦重和大臣官房審議官よりご祝辞を賜り、当財団の永年にわたる研究助成活動への謝意と研究者の皆様に対して激励の言葉を述べられました。また、受領者を代表して、広島大学 古水千尋助教(現在は島根大学 准教授)よりご挨拶いただきました。

贈呈式に続いて、弘前大学 中島晶教授より「認知症予防に有用な食品成分の探索-柑橘類果皮成分ノビレチンを中心に」と題して記念講演をいただきました。(講演録:P4~)

松籟科学技術振興財団は、ハリマ化成グループ株式会社の創業者である故・長谷川末吉が、トール油(松の油)に関する研究、事業開発の功績により『科学技術功労者賞』を受賞したことを機に、科学技術の振興と発展を願って、1983年に設立しました。

今回、助成する研究によって、人類が求めてきた真理の探求がさらに一歩進むことを確信し、今後も、助成、奨励事業を通じて科学技術の振興に貢献して参ります。



挨拶する 長谷川理事長



長谷川理事長と古水助教



祝辞を述べる 文科省 松浦審議官



選考結果を報告する 中條選考委員長



受領者代表 古水助教



記念講演 中島教授



懇親会で祝辞を述べる 渡海議員



懇親会で乾杯の挨拶をする 井上評議員

2025. 4. 14, 化工日, P. 2, <社説 基礎研究を励まし続ける爽やかな風>

社説

2025.4.14

基礎研究を励まし続ける爽やかな風

カーボンニュートラル、競争力を失った製品・事業からの撤退と新規事業の創出、人手不足の解消、先端技術への対応など、環境変化の激しい時代において企業の課題は山積している。各社とも生き残りに必死で、経営陣も従業員も知恵を絞り、汗をかいている。そのなかで日本の科学技術の発展を願い、有望な研究を対象に助成金事業を長年にわたって続けている一企業の姿が尊く映る。

ハリマ化成グループが運営する松籟（しょうらい）科学技術振興財団は1983年の設立以来、基本財産の運用益と寄付金を資金に、これまでに823件、総額9億3290万円を助成してきた。ノーベル化学賞受賞者の野依良治博士、鈴木章博士への助成実績もある。当初の助成金は1件100万円。2年前に諸物価高騰の折、不十分と判断、2000万円に増額された。助

成金は装置や消耗品の購入、学生の学会派遣などに活用される。研究者が思い切り研究に集中できる環境の大きな支えとなるだろう。

この活動は、ハリマ化成グループの創業者である長谷川末吉氏が松から得られるトル油の事業化に取り組み、軌

道に乗せた実績が評価され、当時の科学技術庁（現文部科学省）から表彰されたのがきっかけだった。榮譽に感じた末吉氏が、日本の科学技術の振興に貢献したいとの思いから財団を設立した。トル油事業の端緒となった加古川製造所にあるトル油蒸留パイロットプラントは今年2月、日本化学会から「化学遺産」の認定を受けている。

現在理事長の長谷川吉弘氏（ハリマ化成グループ社長）は「あまり大きなことは出来ない、ささやかな助成だが、今後も末永く続け、科学技術振興に役立ちたい」と謙遜す

る。だが、40年あまり経過しても設立趣旨を変わずに受け継ぎ、日本の未来を担う研究者を励まし続ける。論文発表数の減少など日本の基礎研究力の低下が憂慮されている今日において、その活動は輝きを増してみえる。

長谷川理事長は、先ごろ行われた今年度の贈呈式で研究者の「ひらめき」にも言及した。「ひらめこうと思って、ひらめけるわけではない。どこかでインプットされた情報がある時、ひらめくもの。いろいろな情報を頭に入れてほしい」。そう語り、今年度の受賞者と、選考委員である著名な研究者らの交流を温かい眼差しで促していた。

「松籟」とは松の梢を吹き抜ける風や、その音。世知辛く世界情勢も不透明な昨今、企業が、こんなにも爽やかな風を吹かせる力を秘めていることに、改めて思いを巡らせるのもよいだろう。

財団関係者の方々から、 お祝いと激励のメッセージをいただきました。

松浦 重和 氏

(文部科学省 大臣官房審議官、
同省 塩見みづ枝研究振興局長のご祝辞代読)

研究助成をお受けになられました皆様、誠におめでとうございます。バイオマス資源の利用をはじめ、有機系新規素材、次世代電子材料に関わる研究に対する皆様の日頃からのご研鑽とご尽力に深く敬意を表しますとともに、これを契機として、今後も社会経済の発展に貢献する研究成果を挙げられることを期待しております。また、これまで支えてこられたご家族、関係の方々にも心よりお祝いを申し上げます。

松籟科学技術振興財団が、1983年の設立以来、長年にわたり我が国の学術研究、基礎研究を担う優れた研究者の方々に支援してこれたことは大変意義深いことであり、長谷川理事長をはじめとする財団関係者の皆様のご尽力に対しまして、心から敬意を表します。これからも研究者の大きな励みとなる本事業が末永く継続し、我が国の科学技術の進歩と発展に大きく貢献されることを願っております。科学技術は、人類の知的好奇心に立脚する営みであり、社会課題解決や経済成長の原動力の源泉であります。文部科学省といたしましても、我が国の研究力向上に向けて、科研費などの競争的研究費や基盤的経費による支援を通じた学術研究、基礎研究の充実を図るとともに、次世代を担う若手科学技術人材の意欲と能力を伸長するための取り組みを強化してまいります。結びに、松籟科学技術振興財団の一層のご発展と、皆様方のますますのご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

中條 善樹 氏

(選考委員長 理事)

助成を受けられました皆様、誠におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。当財団では、物価高も考慮し、2023年から助成金を200万円に増額させていただいています。長年研究に携わってきた感覚では、200万円には意外と多くの使い道があると思います。

助成金の増額に伴い、研究助成への応募件数が増加しています。2023年度は63件、2024年度は87件もの応募をいただきました。選考委員長として全ての応募資料に目を通したところ、どれも本当に素晴らしいプロポーザルでした。すごいことができそうだなと感じられるプロポーザルが非常に多かったです。選考委員会では十分な議論を重ねた結果、計画より1件多い、16件の研究テーマを採択しました。

近年、アカデミアの世界では日本からの論文数が減少している、海外で講演する日本人が減ってきた、もっと頑張りが必要だ等、マスコミからよく指摘されています。しかし、選考委員として皆様のプロポーザルを読ませていただき、決してそんなことはないと感じました。

今回の助成をきっかけに研究をさらに進めていただいて、将来的には皆様の力で、日本を、世界を、そしてこれからの時代でしたら宇宙を、ぜひ元気にしていただきたいと思います。

財団理事長と助成金受領者からのご挨拶

長谷川 吉弘

松籟科学技術振興財団理事長(ハリマ化成グループ(株)社長)

当財団は、1983年の設立以来、科学技術の振興によって社会に貢献することを目標に活動を続けて参りました。2023年に創立40周年を迎えたことを機に、助成金を1件につき100万円から200万円に増額したところ、応募件数が87件と大幅に増え、選考委員の先生方にはご苦勞をおかけしましたが、慎重審査の結果16件を採択することとなりました。今回の贈呈により、助成総数は823件、助成金は総額で9億3,290万円となりました。研究助成を受けられる方、ささやかではありますが、さらに一歩踏み出すための研究にお役立ていただきたいと思います。

ここで、皆様にぜひ共有したいトピックスがあります。私が社長を務めるハリマ化成グループ(株)の加古川製造所に残っているトール油精留プラントのパイロットプラントが、2月に日本化学会により化学遺産として認定されました。当社がトール油事業に進出するにあたり、実プラント設計のためのデータを収集する目的で1957年に建設され、試験運転を繰り返して得たデータをもとに、1958年に、日本で初めてのトール油精留プラントが完成しました。そのトール油事業の長年の功績が認められ、創業者が1982年に科学技術功勞者賞をいただきました。そして、その受賞を機に、科学技術の振興を願って、1983年に松籟科学技術振興財団を設立しました。今後も末永く続けて科学技術振興の役に立ちたいと思っておりますので、皆様方のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

古水 千尋 氏

第42回受領者代表(広島大学 助教、現 島根大学 准教授)

この度は、由緒ある松籟科学技術振興財団研究助成のご支援を賜り、誠に光栄に存じます。受領者を代表して、謹んで御礼と、感謝を申し上げます。

私は、植物の成長や環境を制御するペプチドホルモンの研究を行っています。このペプチドホルモンの中には、よく似た分子が微生物から見ついている例があります。私は微生物が持つこのようなペプチドを「模倣ペプチド」と名付けているのですが、微生物が模倣ペプチドを使って植物の細胞を操作することで、植物との共生、あるいは寄生関係を築くのに役立っていると考えられています。今回ご支援いただく研究課題は、模倣ペプチドに注目して、植物と微生物の相互作用をより深く理解すること、さらに、得られた知見を利用して、植物と微生物の相互作用を人為的に操作する技術の開発に結びつけていきたいと考えております。

近い将来、皆様に最新の研究成果をご報告できますよう、サイエンスに全力で楽しく、そして元気に取り組んでまいりたいと思っております。今後とも、温かく見守っていただけますよう、お願い申し上げます。

演題

認知症予防に有用な 食品成分の探索

— 柑橘類果皮成分ノビレチンを中心に —

1. はじめに

本稿では、松籟科学技術振興財団2024年度贈呈式・記念講演における著者の講演内容の概要について記す。認知症予防に有用な食品成分の探索について講演を行った。

2. 研究の背景

近年、日本では生活習慣の向上や医療の発展により高齢化が進行し、アルツハイマー病や脳血管性認知症などの認知症が急増しており、大きな社会問題となっている。アルツハイマー病は認知症の中で最も多い割合を占めており、その神経病理学的特徴としては、アミロイド β が神経細胞外に蓄積した老人斑、過剰リン酸化タウタンパク質が神経細胞内に蓄積した神経原線維変化、それらに伴う神経変性などが挙げられる^[1]。

従来から使用されているアルツハイマー病治療薬であるアセチルコリンエステラーゼ阻害剤やN-methyl-D-aspartate (NMDA) 受容体遮断薬は対症療法薬であり、病気の進行を防ぐことはできないことがわかっている。一方、近年承認された抗アミロイド β 抗体であるレカネマブやドナネマブはアルツハイマー病の原因物質と考えられているアミロイド β を除去する抗体医薬であり、認知機能障害の進行を緩やかにすることが報告されている^[2]。しかし、高額な医薬品であるため医療保険財政の圧迫や適応となる患者が限定されるなどの問題点も指摘されている^[3]。

また、抗アミロイド β 抗体は認知機能障害の進行を緩やかにするが、認知機能を改善するわけではない。アルツハイマー病は脳内の神経細胞が死ぬことにより記憶障害が引き起こされる神経変性疾患であるが、神経細胞は一度死ぬと再生しないため、予防の重要性が強く指摘されている。このような背景から、日常的に摂取できる食品成分やサプリメントによる認知症の予防の重要性が高まっている。



弘前大学 農学生命科学部
教授 中島 晶

3. 柑橘類果皮成分ノビレチン

ノビレチン(図1)はシークワーサー、温州みかん、ポンカンなどの柑橘類の果皮に含まれるポリメキシフラボンであり、様々な生物活性が報告されている^[4]。

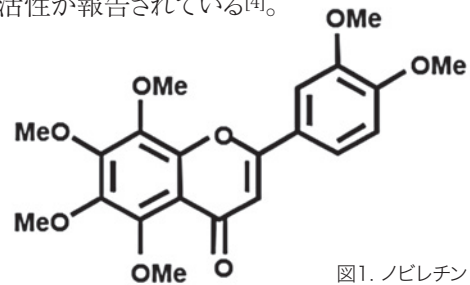


図1. ノビレチン

我々はこれまでに、ノビレチンがアルツハイマー病モデル動物における記憶障害やアミロイド β の蓄積、タウの異常リン酸化などの脳内における神経病理学的変化を改善し、認知症の予防・改善に有用である可能性を明らかにしてきた^[5,6]。また、認知症予防における活用を目指して、ノビレチンを高濃度含有するポンカン果皮エキスの安全性を遺伝毒性試験、亜慢性毒性試験により明らかにしている^[7]。

一方、ノビレチンの脳内ターゲットタンパク質は明らかになっておらず、その作用メカニズムについては不明な点が多く残されている。そこで、ノビレチンの脳内ターゲットタンパク質の探索・同定を目的とし、現在、ノビレチンをビオチンで標識したプローブを用いたアフィニティー解析を実施中である。

4. カシス

カシスは青森県が日本一の生産量を誇る農産物であり、機能性成分として抗酸化作用を有するポリフェノールであるアントシアニンが豊富に含まれている。カシスに多く含まれるアントシアニンとして、シアニジン配糖体であるシアニジン-3-グルコシド(C3G)、シアニジン-3-ルチノシド(C3R)、デルフィニジン配糖体であるデルフィニジン-3-グルコシド(D3G)、デルフィニジン-3-ルチノシド(D3R)が知られている^[8]。本検討では、認知症モデルマウスである老化促進モデルマウスSAMP8の記憶障害に対するアントシアニン高含有カシスエキスの効果の検討を行った^[9]。

8週齢の雄性SAMR1(正常老化マウス)およびSAMP8(老化促進マウス)を8週間予備飼育した後、9週間にわたってAIN-93Gベース通常食もしくはAIN-93Gベース通常食+3%カシス(カシスエキス含有餌)を給餌した。カシスエキス含有餌を9週間給餌した後、オープンフィールド試験、Y字型迷路試験、高架式十字迷路試験、新奇物体認知試験および受動的回避試験により、マウスの記憶学習行動および情動行動を評価した。行動試験終了後、マウス脳海馬を採取し、RNAシーケンスにより海馬mRNA発現量を網羅的に解析した。

新奇物体認知試験の結果を(図2)に示す。新奇物体認知試験は、認知記憶の評価に用いられる試験である。この試験では保持試行における総探索時間に対する新奇物体の探索時間(Discrimination index)を認知記憶の指標とした。訓練試行では、SAMR1群、SAMP8群、SAMP8カシス群においてDiscrimination indexに差は見られなかった。保持試行では、SAMR1群と比べてSAMP8群では新奇物体に対する探索時間が減少し、Discrimination indexの低下が見られた。一方、SAMP8カシス群ではSAMR1群と同程度まで新奇物体に対する探索時間が増加し、Discrimination indexの上昇が見られた。以上の結果から、カシスエキス含有餌の給餌によりSAMP8における認知記憶障害が改善されることが示唆された。

行動試験終了後の海馬におけるRNAシーケンスにおいて、SAMP8群とSAMP8カシス群間で94個の発現変動遺伝子が検出された。これら発現変動遺伝子におけるエンリッチ

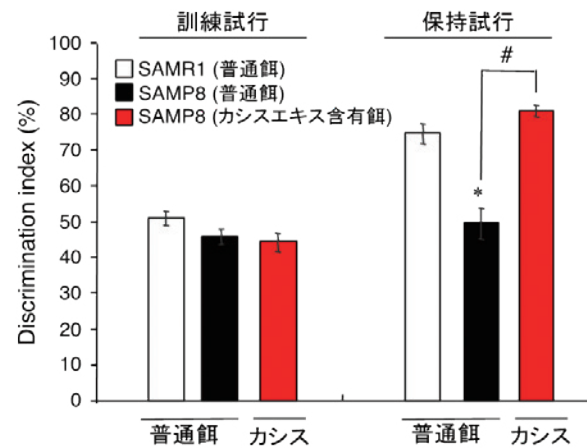


図2. 新奇物体認知試験におけるカシスエキスの効果

メント解析を行ったところ、“smooth endoplasmic reticulum”, “axon”, and “glutamatergic synapse”といった GO termに代表されるクラスターに変動があることが示唆された。以上の結果から、アントシアニン高含有カシス餌の長期処置は、認知症モデルマウス海馬における小胞体ストレスや記憶に関連する遺伝子の発現に影響を与え、記憶障害を改善することが示唆された。カシスの認知症予防における有用性が示唆される。

5. りんご搾汁残渣

青森県の特産品であるりんごの加工残渣は、年間約2万トンに及び、そのほとんどが産業廃棄物として堆肥処理されている。一方で、りんごの加工残渣はグルコシルセラミドやトリテルペノイドを多く含むことが知られており、疾病の予防、改善に有用な食品素材となる可能性を秘めている。本検討ではNMDA受容体遮断薬であるMK-801を投与したマウスにおける記憶障害に対するりんご搾汁残渣エキスの改善効果について検討した^[10]。

8週齢の雄性ddYマウスにりんご搾汁残渣エキス(100or 500mg/kg)を1週間経口投与した後、受動的回避試験によりその記憶障害改善効果を検討した。また、りんご搾汁残渣エキス100mg/kgを1週間経口投与した後のマウス脳海馬における遺伝子発現をRNAシーケンスにより網羅的に解析した。

演題 認知症予防に有用な食品成分の探索

— 柑橘類果皮成分ノビレチンを中心に —

受動的回避試験において、りんご搾汁残渣エキス100 mg/kgを1週間経口投与することにより、MK-801誘発性記憶障害が改善した(図3)。

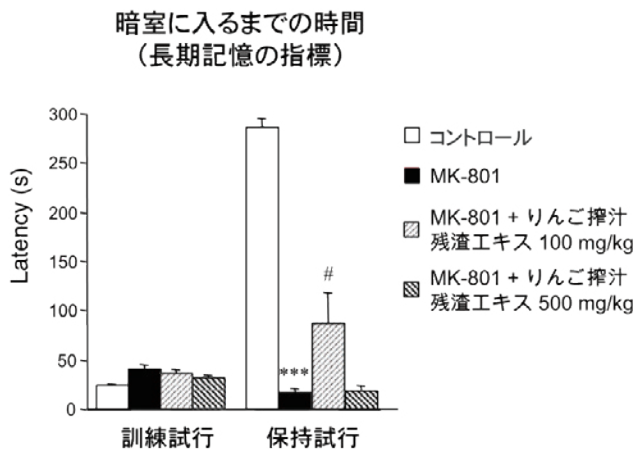


図3. 受動的回避試験におけるりんご搾汁残渣エキスの効果

マウス脳海馬における網羅的遺伝子発現解析の結果、glutathione S-transferase pi (Gstp1) 遺伝子と Zinc finger protein 125 (Zfp125) 遺伝子が発現変動遺伝子として検出された。Gene set enrichment analysis (GSEA) の結果、りんご搾汁残渣エキスの投与により、“synapse” や “neurotransmission” に関連する遺伝子セットの発現上昇が示唆された。以上の結果より、りんご搾汁残渣エキスはアルツハイマー病などの認知症の予防に有用である可能性が示唆される。

6. まとめと展望

ノビレチンに関しては、ノビレチンを高濃度含有する柑橘類果皮エキスをを用いた臨床試験が行われ、アルツハイマー病患者や健常者においてその有効性が報告されている[11-13]。一方、ノビレチンの脳内ターゲットタンパク質が明らかになっていないことから、ノビレチンの記憶障害改善作用メカニズムを明らかにするとともにその有効性・安全性について更なる科学的なエビデンスを得るため、ノビレチンの脳内ターゲットタンパク質の探索・同定が重要な課題である。

カシスおよびりんご搾汁残渣に関しては、アルツハイマー病患者や軽度認知障害の予防・改善における機能性食品素材としての有効性を確立するために、臨床研究の実施が望まれる。

7. 謝辞

本稿で示した研究の一部は公益財団法人松籟科学技術振興財団の支援を受けて実施しました。財団関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、本研究の共同研究者の方々に深く感謝申し上げます。

8. 参考文献

- [1] Long JM and Holtzman DM, Cell 179, 312-339 (2019).
- [2] Heneka MT et al., Lancet 404, 2198-2208 (2024).
- [3] Beveridge J et al., Expert Opin Emerg Drugs 29, 35-43 (2024).
- [4] Huang H et al., Evid Based Complement Alternat Med, 2918796 (2016).
- [5] Nakajima A et al., Clin Psychopharmacol Neurosci 12, 75-82 (2014).
- [6] Nakajima A and Ohizumi Y, Int J Mol Sci 20, E3380 (2019).
- [7] Nakajima A et al., Regul Toxicol Pharmacol 114, 104670 (2020).
- [8] Kähkönen M et al., J Sci Food Agric 83, 1403-1411 (2003).
- [9] Shimada M et al., J Food Biochem, e14295 (2022).
- [10] Watanabe A et al., Nutrients 16, 194 (2024).
- [11] Seki T et al., Geriatr Gerontol Int 13, 236-238 (2013).
- [12] Yamada S et al., Food Sci Nutr 9, 6844-6853 (2021).
- [13] Hashimoto M et al., Food Funct 13, 2768-2781 (2022).

松籟科学技術振興財団の歩み



「松への恩返し」として 松籟科学技術振興財団を設立

播磨化成工業（現・ハリマ化成グループ）の創業者である長谷川末吉は、1982（昭和57）年5月、科学技術庁（現文部科学省）から科学技術や産業の発展・普及に貢献し、科学技術の振興に功績をあげたことで科学技術功労者として表彰されました。このことを契機に、翌年の1983年3月12日、財団法人 松籟科学技術振興財団を設立しました。

財団名に冠された「松籟」とは「松のこずえに吹く風」という意味の言葉です。このときの思いについて長谷川末吉は後にこう述べています。

「私は、いつかは奨学制度をつくって松の化学をより発展させていきたいと考えていた。私を育ててくれた松、ともに長い道を歩んできた松への恩返しである。科学技術功労者賞の受賞は、奨学制度に踏み切る格好の機会であった」

また、財団設立の趣意として長谷川末吉はこうも記しています。

「近年、わが国の科学技術は、自主技術開発への努力を積み重ね、世界に誇る数多くの技術を創出し、確実な地歩を固めてまいりました。しかしながら科学技術全般に視点を移しますと、とかく成果を期待する余り、応用技術に直接結びつかない研究を軽視する傾向があり、基礎科学の立ち遅れが内外より指摘されております。このような時代の要請を踏まえ、松籟科学技術振興財団は、科学技術に関する、調査・研究、国際交流に対する助成などを行い、全地球的な科学技術の振興に貢献しようとするものです」

2人のノーベル化学賞受賞者を 研究助成受領者から輩出

科学技術の振興と世界文化の発展への寄与を目標に、1983年度の第1回目で7名の研究者に総額900万円の研究助成金を贈呈しました。以後、研究助成規模を拡充して助成を続けてきましたが、そのなかには、1986年度（第4回）の

野依良治氏、1991年度（第9回）の鈴木章氏という2人のノーベル化学賞受賞者の名もあります。

野依氏は「キラル触媒による不斉反応の研究」をテーマに、2001年にノーベル化学賞を受賞しました。また、鈴木氏は「有機合成におけるパラジウム触媒クロスカップリング」をテーマに、2010年にノーベル化学賞を受賞しました。



野依 良治 博士

1986年 第4回研究助成
2001年 ノーベル化学賞受賞



鈴木 章 博士

1991年 第9回研究助成
2010年 ノーベル化学賞受賞

長谷川末吉の遺志を継ぎ 科学技術への貢献は続く

このように松籟科学技術振興財団は優れた科学研究への助成を続け、2013年には公益財団法人に移行し、2022年度には第40回目を迎えました。これを機に2023年度より、研究助成1件当たり、従来の100万円から200万円に増額し、より充実した支援を目指しています。今回の贈呈により、助成件数の総数は823件、助成額は累計9億3,290万円となりました。

現在、世界は環境問題、エネルギー問題、持続可能性などさまざまな課題を抱えており、その解決に向け、科学技術の一層の進展が求められています。松籟科学技術振興財団は創業者・長谷川末吉の遺志を継ぎ、これからも全地球的な科学技術の振興に貢献してまいります。

松籟科学技術振興財団 2024年度 研究助成採択者一覧

課題A:「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用に関わる研究」

藪下 瑞帆 (やぶした みずほ)

東北大学大学院
助教

担持金属触媒上での逐次的な脱水素・水素化を鍵とする希少糖合成系の創成



古水 千尋 (ふるみず ちひろ)

広島大学
自然科学研究支援開発センター
助教

寄生・共生微生物の模倣ペプチドに学ぶ植物ペプチド潜在力の理解とその利用



井上 晋一郎 (いのうえ しんいちろう)

埼玉大学大学院
准教授

植物バイオマスを支える気孔開口の分子機構の解明



日比野 絵美 (ひびの えみ)

名古屋大学大学院
助教

植物由来成分が誘導するがん抑制タンパク質p53凝集体の機能解析



水谷 拓 (みずたに たく)

東京大学大学院
特任助教

植物が生産する特殊アミノ酸の酵素合成に関する研究



川口 耕一郎 (かわぐち こういちろう)

京都工芸繊維大学
講師

老化細胞特異的にアポトーシスを誘導するカテキン重合体の探索とその作用機序の解明



課題B:「エレクトロニクスの次世代を担う材料および周辺技術に関わる研究」

鈴木 弘朗 (すずき ひろお)

岡山大学学術研究院
助教

閉じ込め空間における二次元半導体の気相-液相-固相成長のその場観測による成長制御法の開発



大高 雄平 (おおたか ゆうへい)

東京大学大学院
特任研究員

半導体放熱用高熱伝導率AIN薄膜の低温(400℃以下)成長手法の開発



桑城 志帆 (くわしろ しほ)

大阪産業技術研究所
研究員

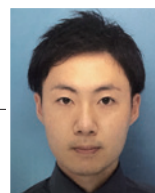
環境負荷軽減無溶剤アクリル/ウレタン高熱伝導粘着シートの開発



近藤 慎司 (こんどう しんじ)

大阪大学大学院
助教

リチウム金属負極の二次電池化を実現する多機能型ポリアニオン電着被膜の物性チューニング



課題C:「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化に関わる研究」

平野 康次 (ひらの こうじ)

大阪大学大学院
教授

埋もれた元素「ヒ素」を鍵とする機能性パイ電子系の創成



渡邊 貴一 (わたなべ たかいち)

岡山大学学術研究院
准教授

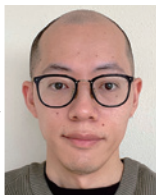
伸縮性と高いイオン伝導性を併せ持つポリマー材料の開発



石田 真敏 (いしだ まさとし)

東京都立大学大学院
准教授

光合成光捕集アンテナを模倣したBODIPYナノリングの創製



Nalinthip Chanthaset

奈良先端科学技術大学院大学
助教

人工椎間板開発を目指した新しいポリブチレンサクシネート誘導体の創製



近藤 梓 (こんどう あずさ)

東北大学大学院
准教授

発光材料の創製を指向した新規縮環型複素芳香族化合物のモジュラー合成



岩崎 義己 (いわさき よしき)

大阪公立大学
量子物質開拓研究センター
特任研究員

有機磁性体における超熱輸送と磁場スイッチング機能性の探索



研究助成 及び 募集要項

(2025年度 募集要項)

研究助成事業

研究課題

課題 A

「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用に関わる研究」

課題 B

「エレクトロニクスの次世代を担う材料および周辺技術に関わる研究」

課題 C

「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化に関わる研究」

応募資格

国公立大学、高等専門学校、国公立研究機関

あるいはそれに準ずる研究機関に所属する常勤の研究者

年齢制限: 45歳以下とする(原則)

助成金総額

助成金総額: 3,000万円程度

1件当たりの助成額: 200万円

研究助成金交付についての選考手続き

手続きの概要は以下の通りですが、詳細については、7月前後に更新するホームページをご確認ください。

募集期間: 2025年7月21日～9月30日

選考審査: 課題ごとの選考委員による1次審査を経て、12月に開催する選考委員会にて採択テーマを最終決定します。採択結果は、年内に応募者に連絡し、助成金は2026年3月に給付します。

詳しくは財団のホームページをご覧ください。

公益財団法人 松籟科学技術振興財団 ホームページ

<https://www.shorai-foundation.or.jp/>



財団の概要

名 称	公益財団法人松籟科学技術振興財団 Shorai Foundation for Science and Technology
所在地	大阪府大阪市中央区今橋4丁目4番7号
設 立	1983年3月12日 2013年4月1日 公益財団法人へ移行
理事長	長谷川 吉弘
目 的	当財団では、科学技術に関する調査・研究に対する助成・奨励を行うことにより、科学技術の振興と世界文化の発展に寄与することを目的としています。
事 業	研究助成事業、その他、当財団の目的を達成するために必要な事業

役員と評議員 (2025年7月現在)

理事長	長谷川 吉弘	ハリマ化成グループ(株) 代表取締役社長
理 事	井上 明久	城西大学 理事長特別顧問
	酒井 清孝	早稲田大学 名誉教授
	染谷 隆夫	東京大学 副学長
	中條 善樹	京都大学 名誉教授
	中島 邦雄	政策研究大学院大学 名誉教授
監 事	金城 照夫	ハリマ化成グループ(株) 顧問
	住田 裕子	弁護士
評議員	磯貝 明	東京大学 特別教授
	大山 俊幸	横浜国立大学 教授
	伊永 隆史	慶応義塾大学 訪問教授
	柴田 武彦	理化学研究所 名誉研究員
	杉江 他曾宏	兵庫県立大学 名誉教授
	谷中 一朗	ハリマ化成グループ(株) 代表取締役専務
	鷹巣 守	大阪大学 教授
	松原 英一郎	京都大学 名誉教授
	村上 正紀	立命館大学 特別研究フェロー

選考委員会 (2025年7月現在)

選考委員長	中條 善樹	京都大学 名誉教授
選考委員		
課題A	磯貝 明	東京大学 特別教授
	柴田 武彦	理化学研究所 名誉研究員
	稲岡 和茂	ハリマ化成(株) 研究開発カンパニー 研究開発センター長
課題B	松原 英一郎	京都大学 名誉教授
	中西 研介	ハリマ化成(株) 研究開発カンパニー 電子材料開発室長
課題C	大山 俊幸	横浜国立大学 教授
	鷹巣 守	大阪大学 教授
	小畑 裕作	ハリマ化成(株) 研究開発カンパニー 研究企画部長

公益財団法人

松籟科学技術振興財団

Shorai Foundation for Science and Technology